



www.gwnn.info

GWNN オリジナル 拭漆仕上げエレキギター



GWNN オリジナルの拭漆仕上げフィニッシュは、安易な和風趣味や無意味な奇抜さを追い求めて考案されたものではありません。あくまでも、道具としてのエレキギター、エレキベースのもてるポテンシャルを、最大限引き出すにはどうすればよいか、素材、ハードウェア、そして、確かな技術と知識、どれも大事な要素ですが、それ以上に何かできないか… そういった性能本意の考えに基づいて開発されたエレキギター塗装法です。

GWNN が導き出した結論は…

「漆」は、この世に存在する塗料の中で性能的に一番優れている塗料です。木地を硬い皮膜で覆い隠してしまう石油化学系の素材とは違い、天然素材である「漆」はしなやかで木地に優しく、日本の気候風土に適し、さらに、硬化すればラッカーやポリエステルと同等の強靭さをもつといわれます。それゆえに、日用品をはじめ、かつては刀の鞘や甲冑の仕上げにも使われたといわれています。

GWNN ではその「漆」を吹き付けたり、塗ったりするのではなく、木地に直接生漆を塗りつけては刷り込むという作業を、何十回も繰り返す「拭き漆技法」を採用しました。拭き漆を施したギターの持つ独特の風合いと手触りのよさは、この気の遠くなるような工程を経ることによって生み出されます。たとえそれが「名前のないギター」であっても、まさしく魂を注入するかの如く、漆職人が一つ一つの工程を丁寧に仕上げていきます。



その技法は…

従来のオイルフィニッシュのようではありませんが、天然素材である漆は、木材の細胞レベルにまで入り込み、極薄い塗装皮膜を形成することから、その木目の美しさ、強靭さはオイルフィニッシュをはるかに凌駕します。それだけでなく、従来の塗装材料で仕上げられたギターにはないレスポンスをも生み出し、あなたのギターは劇的な変化を遂げるでしょう。

京都の伝統産業の世界から、新たな境地を求めて一步を踏み出した若い才能と、GWNN の経験と技術が融合して生み出された、いわば究極のカスタマイズです。自信をもってお奨めします。

拭き漆仕上げ工程の一例

STEP 1



まずは、塗装を剥がし、漆をしみこませる状態にします。電動サンダーを使うので、どうしても細かい傷が残ってしまいますが、ポリエステルの下地はプラスチックを溶かして木地にしみこませているようなものなので、力任せにやらなければ完全除去はできません。それでも、熟練の漆職人が丁寧に小傷を消しつつ、磨きなおしをしています。

STEP2



梨子地漆(*1)に顔料を混ぜ、テレピン(*2)で希釈したものを塗って布拭きし、木地固めをしています。通常の塗装との決定的な違いは、この木地固めです。この生地固めが拭き漆技法の特徴です。

***1 梨地漆:**色味が薄く透明度の高い漆。普通の漆は拭き漆を施すと、硬化していくとこげ茶色に変色していくが、梨地漆は透明度が高いため色調に影響が出にくい。

***2 テレピン:**マツ科の樹木のチップ、あるいはそれらの樹木から得られた松脂を水蒸気蒸留することによって得られる精油。

STEP 3



一回目の木地固めと着色後、漆風呂(*3)で乾燥させるとこうなります。

***3 漆風呂:**漆の硬化が最も進む、温度 20～25 度、湿度 75～85%を維持した漆用の乾燥器具。漆は、その成分に含まれる「ウルシオール」が、酵素「ラッカーゼ」の働きにより空気中の酸素と水分と反応することで硬化する。

STEP4



一回はテレピン油で希釈したものを拭きつけ、二回ほど色の付いた漆で拭きます。シースルーの着色工程と似ていますが、複数回に分けて色をつけるのも通常の塗装とは違います。独特の風合いは、ここからきているのかもしれませんが。

STEP5



発色をなるべく妨げないように梨子漆のみ(顔料なし)で拭きます。漆の種類と拭き取り加減を微妙に変えていくことはありますが、ひたすら同じ工程を繰り返して、独特の深みを出していくのです。

STEP6



(5)の工程を数回繰り返したものの。布で拭き取りをしているので、まだあまり艶はでていません。

STEP7



最初の木地固めから含め、十回ほど漆を拭いた状態です。ここからは布ではなく紙で拭き取っているため、ある程度漆が残り、艶が出てきます。

STEP8



これまで使ってきた漆に、もう一段階上質の漆を混ぜて拭き上げます。徐々に漆の質を上げ、拭き取り加減などで艶を出していきます。

STEP9



ハードウェア、ピックアップを取り付けて、セットアップして完成です。今までの塗装にはなかった、独特の風合いに仕上がりました。